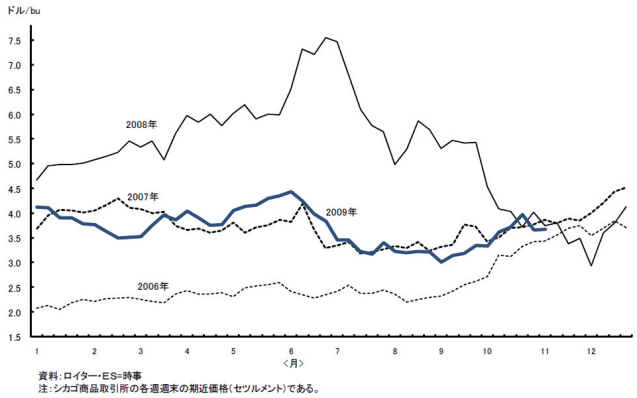
今後の相場動向について

■現在までの価格推移

（とうもろこし）

ご承知のとおり2008年は、作付面積の減少・産地降雨による作付遅れ・加えて６月には豪雨や洪水による減産懸念から一時7.6ドル／ブッシェルと史上最高値を更新した。その後、天候改善・リーマンショック以降商品市場からの資金流出・不況による世界的需要減退懸念から12月初旬にかけて3.0ドル／ブッシェル割れまで値を削る展開となった。

2009年は、世界同時不況による需要減少が見込まれるなか軟調に推移していたが、３月以降の作付遅れ・原油価格の上昇によりやや値を上げた。その後天候回復により軟化したが10月以降再び産地天候不順による収穫遅れから値を上げ､現在3.9ドル／ブッシェル前後で推移している。

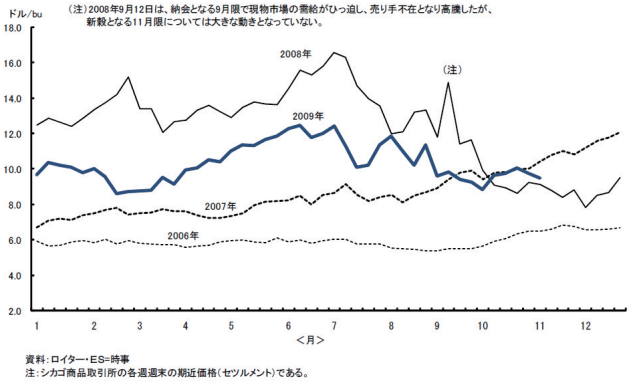


（農水省HPより抜粋）

（大　豆）

2008年は、３月以降高騰し洪水被害が懸念された７月には16.6ドル／ブッシェルと史上最高値を更新した。その後、とうもろこし同様、天候回復・リーマンショックにより年末へ向け値を削る展開となった。

2009年は、需要減少が見込まれるなか、３月以降アルゼンチンの旱魃・旺盛な中国需要により、米国の期末在庫逼迫懸念から上伸し、６月には12ドル／ブッシェルを超える水準まで高騰した。その後は、好悪材料に敏感に反応する非常にボラティリティの高い相場展開となったが、米国における豊作見通しが確認されるとともに徐々に値を削る展開となり、現在10ドル／ブッシェル前後で推移している。



（農水省HPより抜粋）

■2009／2010年の需給見通し（11月米国農務省）

（とうもろこし）

	米国	前年比	世界	前年比
生産量	12,921	106.8%	789.73	99.7%
需要量	12,980	107.6%	803.27	103.6%
期末在庫	1,625	97.1%	132.41	90.7%
率	12.5%	△1.4	16.5%	△2.3

（大豆）

	米国	前年比	世界	前年比
生産量	3,319	111.9%	250.23	118.7%
需要量	3,195	104.9%	233.36	105.9%
期末在庫	270	195.7%	57.39	135.4%
率	8.5%	+4.0	24.6%	+5.4

（米国：百万ブッシェル、世界：百万トン）

09／10年のとうもろこし需給は、生産量は米国が増加するものの中国・EUなどの減産見通しにより世界的には前年比0.3%の減少見通し｡需要量は米国・中国の増加により前年比3.6%の増加見通しとなり､期末在庫は米国・世界とも、いずれも減少見通しとなっている。

大豆需給については、米国生産量が前年比11.9%の増加・世界生産量も旱魃だったアルゼンチンの回復により前年比18.7%と大幅増加見通しである。需要量においては、米国・世界とも増加見通しではあるが、いずれも生産量を下回り、期末在庫が積み増しされる見通しである。

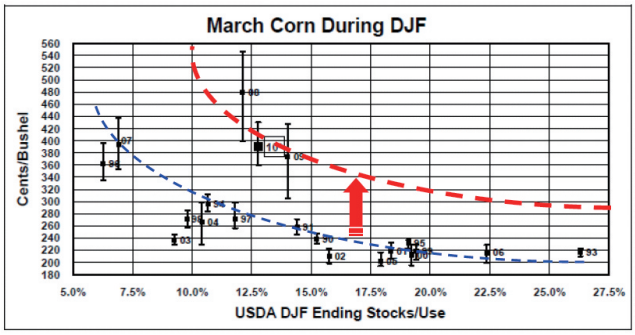
■今後の相場動向

こうした需給環境を背景に今後どのような価格水準となるのか。

2009年に入り穀物相場はある程度落ち着きを取り戻しつつあるが、これはリーマンショック以降、世界的な金融不安から信用市場が収縮し、行き過ぎた投機資金が流出したことによる影響が大きい。

09／10年産の穀物需給が、比較的豊作見通しとなったことから直近の需給逼迫感はやや後退したものの、中長期的な厳しい需給環境を背景に投機資金の最流入も活発化するなか、価格は依然高止まりしている状況である。

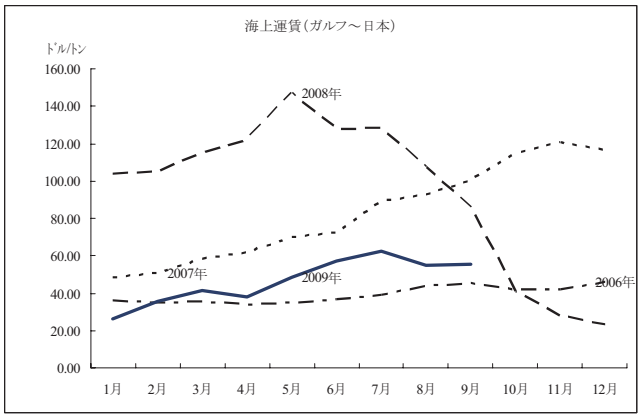
下表は期末在庫率ととうもろこし価格（３月限）の相関図であるが、明らかに2006年以前からステージアップしているのが見て取れる。



年明け以降においても、①収穫遅れによる最終生産量の減少、②ドル安に伴う投機資金の更なる流入、③南米作柄状況(アルゼンチンが旱魃ぎみ)、など懸念材料があるなか、４ドル／ブッシェル前後を中心とした底堅い相場展開が予想されており、その後の新穀作付面積・作付進捗の動向次第では更なる高騰が懸念される。

■海上運賃

ガルフ～日本の海上運賃は2008年５月の140ドル／トン超をピークにその後急落、年末には20ドル／トンレベルまで下落した。2009年に入り依然旺盛な中国需要・投機資金の流入により70ドル／トン前後まで値を戻している。



引き続き旺盛な需要から堅調に推移することが予想されるが、2010年は新造船の投入が多く予定されていることから、上値が抑えられることを期待したい。

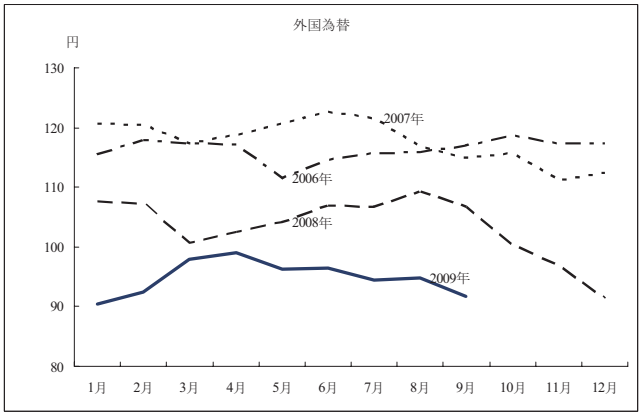
■外国為替

2008年春先以降はじりじりと円が売られる展開となっていたが、９月のリーマンショックを機に反騰、年末へ向け心理的節目である100円を割り込み一時88円台まで円高が進んだ。

2009年年明け以降は日本の経済指標の悪化、米景気楽観論の台頭から円ジリ安の展開となったが、春先以降は再び円高基調にて推移した。

その後90円を挟んだ方向感を探る展開となっていたが、11月のドバイ首長国の政府系企業グループの債務返済の延期要請、いわゆるドバイショックにより一気に円高が進み、一時14年振りとなる84円台を至現した。

2010年前半については、円最高値（80円絡み　95年４月）も視野に入れつつ、円堅調地合での相場展開が予想されている。



以上のとおり、シカゴ相場・海上運賃は、投機資金の再流入により再び騰勢を強めつつあり、円高基調という好材料はあるものの引き続き予断を許さない状況が見込まれる。

中長期的な世界の穀物需給は依然として厳しい状況であり、各調査機関とも将来的な穀物価格は、高止まりないしは緩やかな上昇を見込んでおり、今後新たな均衡点を探る相場展開が予想される。

（飼料原料課　浅井）